

優秀賞

## 越谷市内の石仏・石塔ベストテン

加藤 幸一

越谷市内の石仏・石塔の悉皆調査を平成五年から十九年にかけて十五年間、一つ一つの石仏・石塔に対して、文字の解読とスケッチをしながら記録してきました。

その後も、再度の部分的な調査を繰り返しながら手直しや石仏・石塔の追加をしてきました。その結果、越谷市内の文化遺産として残したい石仏・石塔の数はおよそ千百五十基程に及びました。石仏・石塔は一基、二基と数えます。膨大な中から、東武鉄道沿線を中心に歴史的価値が大きい石仏・石塔を私なりに十点程選びました。

## 1. 青木宗義の庚申塔

「場所」大聖寺本堂の向かって右側（相模町六丁目）

青木宗義は江戸時代の草加宿の石工である。その子孫は今も草加の日光街道沿いの青木石材店として継承されている。

この青木宗義の庚申塔は、芸術的にも特に高く評価されており、この作品は天保十年（一八三九）の造立で、当時

の庶民信仰がよく反映されている。

庚申信仰は、六十日ごとに一回やってくる庚申の日に地域の男性達が一堂に会して徹夜し、鶏の鳴き声が聞こえる頃に解散する。その記念として造立されたのが庚申塔である。

上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は、頭髮が炎のように逆立ち、その中にとぐるを巻き鎌首をもたげた蛇が見られる。顔つきは忿怒の形相をなし、三つ目となっている。胸には鬘髻の首飾りをつけ、各手には、弓・矢・輪宝（矛先が八方に出ている）・矛や剣を持ち、左手で女性の髪の毛をつかまえてぶら下げている。足下には鬼を踏みつぶし、その鬼の手足の指はそれぞれ三本しかない。

さらに鬼の下には三猿がいる。向かって左端は神社の御幣を担ぐ「見ざる」。中央は、へその下には陰部が描かれている「聞かざる」。当時は陰部に朱を塗って下の病を治

そうとする庶民信仰がみられた。左端は、猿が女性の臀部や陰部を連想させる桃を持つ「言わざる」。猿は性欲の強い動物とされている。桃持ち猿は庶民の間では子授け、安産、下の病の祈願の対象となっていた。以上の三猿は山王信仰の影響が如実に表されていて、西方村の鎮守、山王日枝神社からの影響を受けたのであろう。

最下段には、雌雄の鶏が対にして描かれている。細部まで描かれていて庚申塔としてはとても珍しい。

## 2. 三猿塔

〔場所〕大聖寺本堂の向かって右側（相模町六丁目）

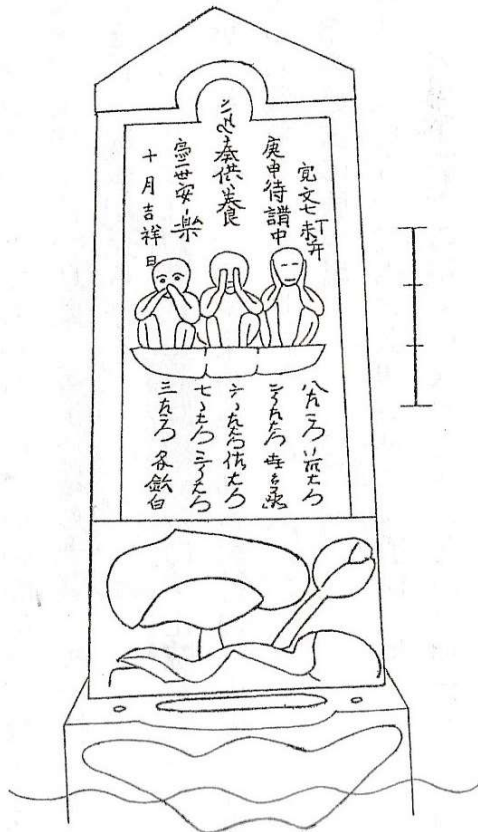
これは、江戸初期にみられる型式の板碑型石塔に「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿のみを描いた庚申塔である。全国で最古の三猿庚申塔は、神奈川県藤沢市にある承応二年（一六五三）であるが、この三猿庚申塔はそのわずかに十四年後の寛文七年（一六六七）に造立されたものである。三猿庚申塔としては、増森の森西川集会所の寛文四年について市内で二番目に古い。

## 3. 不動明王像

〔場所〕八条用水の馬頭橋のそば（相模町二丁目）

最上段には火炎に包まれた剣と綱を持つ不動明王像がある。中段の向かって左側の側面には、西方の不動尊（大聖寺）に参詣に行くための道しるべ「不動尊道」の文字が刻まれている。向かって右側の側面には南に進むと草加、北

江戸初期の三猿庚申塔



## 2. 三猿塔

さんえん



## 1. 青木宗義の庚申塔

そうぎ こうしんとう

文化財的価値を有する秀作

に進むと越ヶ谷の道しるべが記されている。  
 この石仏は関東の馬喰長と呼ばれた西方に住む石塚長冶郎が奉納したもので、馬喰とは馬を売買・斡旋する人のこととで、正面には馬の頭を載せた馬頭観音が描かれている。すぐそばには平成四年（一九九二）に架けられた橋があり、この石塔の馬頭観音にちなんで「馬頭橋」と名付けられている。

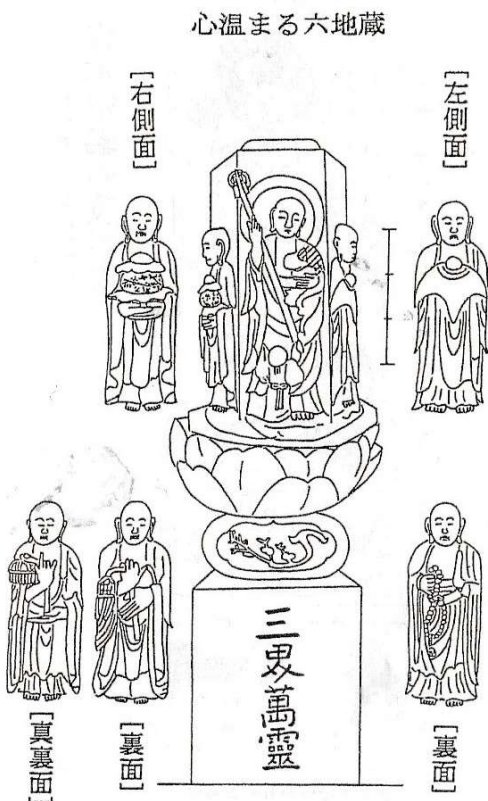
#### 4. 六地藏

「場所」栃木銀行越ヶ谷支店の駐車場そば（瓦曾根一丁目）  
 この六地藏の石塔の正面には、子どもを左手で抱え、右

### 3. 不動明王像



### 4. 六地藏



手は錫杖を持ち、足元では子どもが地藏にすがっている様子が描かれていてとても頼もしい。他の面には、数珠を持つ地藏、宝珠を持つ地藏、香炉を持つ地藏、幡を持つ地藏、天蓋を持つ地藏が見られる。  
 このあたりは江戸時代に修験道寺院の東正院があつた所で、越ヶ谷一の一の南東角地、栃木銀行の駐車場には東正院の名残である薬師堂があつた。

#### 5. 市内最古の庚申塔

「場所」天嶽寺の境内の久伊豆神社参道側（越ヶ谷）  
 越ヶ谷の天嶽寺の境内に入った所の久伊豆神社の参道側

にある。一見してお地藏様の石仏であるが、よく見ると「庚申供養」の文字が見られる。承応三年（一六五四）十月十五日に造立された市内最古の庚申塔と判明した。

市内最古の庚申塔はその他にも谷中の観音堂に同じく承応三年十月十五日の板碑型庚申塔がある。

また、大相模公民館裏の路傍に越谷市の文化財に指定されている庚申塔がある。造立年は「承応二年甲午無神月（十月）吉日」と刻まれているが、承応二年の干支は癸巳でなくしてはならないのに矛盾している。当時の地元の人々にとつては干支の方が生活に密着しているので、干支の方が正しいと思われる。つまり、承応三年十月の造立が正しい。以上により、市内最古の庚申塔は三基程見られることになる。

## 6. 石摺りの鏡文字塔

〔場所〕天嶽寺の境内の鐘樓の裏側（越ヶ谷）

石摺りとは石碑などの文字を紙に摺り取ることである。拓本とも呼ばれる。

江戸の芝の浄土宗の寺院、増上寺三十六世の祐天上人直筆の鏡文字が刻まれている。信仰の厚い人々が天嶽寺に来て、祐天上人の文字を石摺りして自宅に持ち帰り、例えば掛け軸などにして家で大切にお祀りしたことであろう。

## 7. 阿弥陀如来像

〔場所〕西円寺境内の薬師堂そば（花田一丁目）

## 5. 市内最古の庚申塔

こうしんとう

奉造立庚申供養現當所願成就于時承應三年甲午法界

會田新右門  
町山物兵衛  
甲長兵衛  
瀬山五右衛門  
横川兵衛  
金野新右門  
町山物兵衛  
甲長兵衛  
瀬山五右衛門  
横川兵衛

市内最古の庚申塔



## 6. 石摺り鏡文字塔

いしず かがみ

珍しい鏡文字塔



江戸時代初期の寛文六年（一六六六）に造立された阿弥陀如来像である。阿弥陀如来が親指と人差し指で輪を作つて結んだ印の様子が今日まで破損されずにしっかりと残っているのが珍しい。この阿弥陀如来迎印によつて阿弥陀如来と判明できる。

上部に刻まれている文字は梵字といい、中央には阿弥陀如来を表す「キリーク」、その両側には阿弥陀の脇侍である「サ」（観音）と「サク」（勢至）の梵字が刻まれている。

7. 阿弥陀如来像

あみだによらい

印を結んだ手指がよくわかる



奉造立阿弥陀如来念佛諸中人數四十人二世安樂

奉造立阿弥陀如来念佛諸中人數四十人二世安樂

寛文六年 丙十一月拾五日 花田邑 結衆中 敬白

寛文六年 丙十一月拾五日 花田邑 結衆中 敬白

8. 釈迦如来像

「場所」船渡新田自治会館（船渡）

この釈迦如来像は、巨大な丸彫りの石仏で、これほど大きな石仏は珍しい。瞑想をして両手の指で禅定印を結んでいる。元は、船渡二八六の海老名家の南東側邸外あたりにあつて、そこにお堂もあつた。現在はその地は空地となつていて、釈迦如来像はすぐそばの船渡新田自治会館の前に移されているのである。釈迦如来像の手前に収納庫が置かれて隠れているので、収納庫の裏側に回らないと見られない。

8. 釈迦如来像

しやかによらい

巨大な丸彫り石仏



9. 如意輪観音像

「場所」覚山坊墓地（平方）

右手で頰杖をし、首をややかしげて右膝を立てて座る輪王座の姿をしている。六本の腕をしていて、手には名の通り如意宝珠と車輪の形をしている輪宝を持ち、他に蓮華の花や数珠も持っている。江戸時代初期の万治三年（二六六〇）の石仏である。

銘文を見ると「庚申の供養」と刻まれているので、如意輪観音を主尊とした初期の庚申塔であるとわかる。如意輪観音を主尊とするのは珍しい。

さらによく見ると、武州埼玉郡新方領平方村」とす

9. 如意輪観音菩薩像

万治三年 庚申之 供養 十二人



中世の地名の名残

るところを「武州葛飾郡新方庄平方村」と刻まれている。

かつての下総国葛飾郡から武蔵国に移行しても、国名が変わる前の中世の地名の名残が残ったものである。「新方庄」も江戸時代以前の古い呼び方である。

時代の推移を如実に表している、とても貴重な石仏といえる。

10. 六観音

「場所」恩間の薬師堂（恩間）

六種類の観音が描かれた六面石幢型の貴重な石塔である。観音像の上部にはそれぞれの仏を表す梵字が刻まれている。描かれた観音像を紹介すると以下の通りである。

① 如意輪観音像……右膝を立てて座り、観音様がよく持つ蓮華の花の他に、如意宝珠と輪宝を持っている。

② 准胝観音像……別名「七胝仏母」とも呼ばれ、無数の仏様たちを生んだ母という意味である。

③ 千手観音像……千本の手を持ち、しかもその一手一手ごとの手のひらに目がある。そのために「千手千眼観音」とも呼ばれ、千の慈悲の手と千の慈悲の目によって多くの人々をもれなく救おうとする仏様である。実際には、千本の手を彫りだすことは困難なために、中央の合掌した二手の他に十六手や四十手に省略されることが多い。ここではさらに省略され合掌された二手とその他に六手が描かれている。



六種類の観音がよくわかる

## 10. 六観音ろく

④馬頭観音像……頭上には馬の頭を置いてあるので馬頭観音像とわかる。荷馬（運送馬）や農馬（農耕馬）が普及するにつれ、江戸時代の中ごろから馬を使用する人々によつて馬頭観音の信仰が盛んになった。

⑤十一面観音像……顔が十一面もあるのでこのように呼ばれる。顔が一面の観音に対して強大な力を持つことになる。左手には観音が持つ蓮華の花を描いている。

⑥聖観音像……本来の姿の観音様である。ただ単に「観音像」とも言う。この聖観音が変化したものが、如意輪観音であり、准胝観音であり、千手観音であり、馬頭観音であり、十一面観音なのである。

# 越谷市内の石仏ベストテン

